



左の峰がキッツシュタインホルン。その下にグレンデが広がっている。

盛田 常夫

氷河スキーを楽しむ -カフルーン旅行

雪がない
昨シーズンはキッツビューヘルへ遠出したので、今シーズンは近場で済まそうと考えていた。何分、車も古くなって、一八万kmほど走っている。雪道で故障などしたら、たまったものではない。新車に買い換えるまで、当分は近場で決めていた。ところが、どんなに雪不足の年でも、滑れるだけの雪があるウイン南のゼンメリングが全滅。二月に入っても緑の草が茂っている。気温が下らないから、人工雪も使えない。

急いで主要なスキー場を調べてみた。二〇〇〇m以下の山には雪がない。キッツビューヘルのリフトもまったく動いていない。とすれば、三〇〇〇m級の山があるインスブルックか、カフルーンしかない。インスブルックは遠いし、途中で大雪にあたら困るとい判断から除外した。カフルーンは二〇〇〇年に悲惨な電車事故があつて何となく気が進まなかつたが、ここに決めてツェル・アム・ゼーとカフルーンのホテルにメールした。

ツェル・アム・ゼーとカフルーンは五kmほどしか離れていないが、二つの町は性格が異なる。カフルーンはキッツシュタインホルン山(三〇〇三m)の氷河スキーを楽しむためのスキー宿場町で、ツェル・アム・ゼーは周辺に二〇〇〇m級のスキー場を抱えるが、どちらかという湖を囲む夏の観光避暑地だ。街に賑わいのありそうなツェル・アム・ゼーのホテル二軒にメールしたが、一軒からは返事なしで、もう一軒からは二月二日から二九日の一週間単位でしか予約を受け付けないという返事がきた。それもハーフボード、六日間のスキーパス付きで、八三ユーロとあつた。これは高い。要するに、雪がないしお客も少ないから、クリスマス直前からしか客を受け付けないといつことだ。

そこで、カフルーンの四つ星ペンションホテルにメールしたら、即座に返事がきた。六泊のハーフボード五日間のスキーパス込みで、六九六ユーロだ。珍しく、すべての部屋でインターネットへの無料接続とあつた。即時に予約すれば、無料のスキーサービスを加えるという。これ以上の条件はないだろうと思つてすぐに予約した。

登山電車事故

カフルーンと言えば、氷河スキー。キッツシュタインホルン(キッツの岩角)の頂上直下、万年氷の上に幅1kmほどの広大なグレンデが広がっている。夏でもスキーが楽しめる、いつでもスノーボード競技ができるように設えている。

カフルーンの町から五kmほど山に入ると、海拔九〇〇m地点のゴンドラの乗り場に着く。そこからゴンドラとリフトを乗り継いで標高差二〇〇〇m上って頂上までいく。大量のお客を頂上まで運ぶために、最新鋭の登山電車が敷設された。海拔九〇〇m地点からほどなく岩山のトンネルに入り、二四五〇m地点のアルビンセンターまで運ぶ電車だ。そしてこの電車が悲惨な大事故に見舞われた。



大事故を起こした登山電車の軌道(廃線)

二〇〇〇年二月二日。日本人スキー客二〇名を含む一六〇余名を載せた登山電車が、トンネル内で火災を起こした。後部車両の暖房機から出火したようだ。トンネル効果で瞬く間に火が広がり、電車が停車してあつたという間にすべてが燃え尽きてしまった。火災の初期に車外に逃れた数名を除き、全員が焼死した。高速道路のトンネル事故でも知られるように、現代の新鋭設備や構築物は意外に火災事故に弱い。逃げ場がない。

この登山電車が営業を再開しているのかと思つていたら、すでに廃棄されていた。ゴンドラからこの登山電車の痕跡を探した。ゴンドラの出発駅から並行して敷設されている車両軌道が残つていて、それが岩山の中腹にぶつかっている。軌道は非常に狭い。トンネル内もさぞかし狭いだろう。廃線になつた登山電車の出発駅は新しいゴンドラの駅舎で覆い被さるよう隠されていた。地上からその現場を見ようとしたが、どの方角からもゴンドラ施設に阻まれて、近づくと見ることができない。せめて慰霊碑でも残っているかと周辺を歩いて見てみたが、何も残されていなかった。

すでにこの事故の刑事裁判は終わつていて、電車の営業主体にも製造会社にも無罪判決が下されている。日本人家族は無念を晴らすべく、民事裁判を続けている。せめて事故現場に慰霊碑などを建て、事故の記憶を風化させないようにして欲しいと思うが、現地の人々には早く忘れたい出来事なのだろう。

登山電車の終着点が二四五〇mのアルビンセンターと書いたが、これは筆者の推測である。電車がどこからトンネルを抜けて、どこへ到着したのか。今では終着点の痕跡が見あたらない。頂上に向かうケーブルに乗り換える二四五〇mのアルビンセンターは新設の大きな構

築物だから、多分、その建物の下に登山電車の終着点があつたのだろうと推測した。火災を起こした電車がトンネル内で停車せず、そのまま数分走つて地上にでていたら、助かつた人がいたかもしれない。インターネットでも事故の資料が見つからなかつた。

グレンデ評価

氷河スキーというから、さぞかしスリリングだろうなという期待と不安があつた。しかし、これは期待外れだった。

築物だから、多分、その建物の下に登山電車の終着点があつたのだろうと推測した。火災を起こした電車がトンネル内で停車せず、そのまま数分走つて地上にでていたら、助かつた人がいたかもしれない。インターネットでも事故の資料が見つからなかつた。



氷河グレンデ(2900m)

幸い、五日間とも頂上は快晴で気温もマイナス二〜一度(最初の日はマイナス五〜六度で、午前二時から午後二時まで陽が燦々とグレンデを照らす最高のコンディションだつた。頂上直下海拔二九〇〇mの広大なグレンデが、一五km程度の距離のコースになっている。クリスマス前はスキー客が少なく、グレンデを独占するように滑ることができる。Tバーの待ち時間もない。

このように書けば何の不満もないのだが、カフルーンのグレンデはこれだけなのだ。もちろん、頂上からそのままアルビンセンター、さらには二〇〇〇m地点のゴンドラ乗換駅に下るコースはあるが、氷河スキーは頂上部のグレンデだけだ。しかも斜度がない。最初の八〇〇mほどは初級者、後の七〇〇mほどが中級者のコースだから、何日も滑るようなコースではない。キッツビューヘルは毎日いろいろなグレンデを楽しむことができたが、カフルーンは二つのグレンデしかない。

毎年、ゼンメリングで滑っている時は、もつと遠出して広いグレンデでスキーを楽しみたいと思つていた。ゼンメリングのグレンデは距離こそ短い、コースが狭くて斜度が高く、よほどスリリングだ。今になって、ゼンメリングの良さが分かつた。ゼンメリングの二つのスキー場を使えば、四〜五日間のスキーを存分に楽しめることができる。何よりも、何百kmも遠出する必要がない。

カフルーン最後の日にインターネットでゼンメリングを調べてみた。二月三日から開業とあつたが、ゴンドラ一本だけの営業だ。年末にW杯の女子回転と女子GS(ジャイアント・スラローム)が予定されていて、中央の競技用コースだけが人工雪で固められたようだ。例年より回転競技のスタート地点が下げられ、例年の回転のスタート地点がGSのスタート地点になつていた。海拔

一七〇〇mのゼンメリングでW杯が開催されるのは斜度の高いコースがあり、かつ夜間照明の設備が整っているから。W杯が終われば一般に開放されるが、しかしコースだけでは飽きてしまつ。雪が積もるまで待たざるを得ない。

予約条件にご用心

カフルーンのペンションホテルは個人経営にしては大きな宿だつた。ホテル内に三つのレストラン、プール、フィットネスルームを備えている。夕食は四コースメニュー

で内容も充実していた。町を散策したが、同じような規模のペンションがいくつもある。カフルーンもツェル・アム・ゼーもクリスマス前はまた閑散としていて、ツェル・アム・ゼーなどは完全にオフシーズンという雰囲気だつた。

ホテル客がどつと増えたのは二月二日の金曜日の夜から。二四日のクリスマスイヴの夕食では三つのレストランとも満席になつた。それでも二四日のゴンドラは完全貸切の空き具合で、ゴンドラ駅前の駐車場スペースは三割程度しか埋まっていなかつた。

最初に案内されたホテルの部屋にはインターネットの接続コンセントがなかつた。毎日、こまめにスパニールを削除しないと、溜まったメールから必要なメールを取り出すのがたいへんな作業になる。だから、インターネットが接続できる宿は非常に有り難い。予約確認メールには、すべての部屋でインターネット接続可」という謳い文句があつたと記憶していたが、そのメールコピーを持つてくるのを忘れた。受付で尋ねると、インターネット接続の部屋は割増になるといふ。「そんな馬鹿な、条件が違う」といふと、翌朝に返事するといふ。友人に送つた予約メールを転送してもらい、フロアに設置されたPCで確認した。確かに全室でインターネット接続と書いてある。もう一度、部屋にあるプロシユアを良く読んでみると、やはり全室でラップトップに接続可と太文字で記してある。

とりあえず夕食の後に掛け合おうと食事している所へ、ホテルのオーナーが各テーブルを回つて挨拶している。何か問題がないか尋ねている。ここが個人経営のペンションの良さか。インターネット接続ができないのは困るといふと、後で調べるので翌朝レセプションに来て欲しいといふ。こうして、翌日から新館の部屋に移ることができた。スキーサービスも、夕方にスキー置き場に置いてくれ

れば、翌朝まで仕上げておくという。提携のスキーショップが無料で手入れする。確かに、翌朝には鏡が綺麗に落とされて、戻されていた。もつとも、各スキー場にあるInterSport店では、この時期三〇分でスキー整備をやってくれる。これまで、初滑り前にブタベスタの店で整備していたが、現地の雪質に合わせて現地で整備してもらつたのが良い。また、ICチップのスキーパスはこの売り場で返却しても三ユーロ戻ってくる。ホテルの請求書には、スキーバス発行料としてこの三ユーロがちゃんと記載されていた。



ゴンドラ終着駅(3029m)の眼下に広がる氷河グレンデ(2900m)



眼下に見るアルプスとツェル・アム・ゼー